

子宮がん

のこと

子宮がんには、入り口近くに行ける「子宮頸がん」と奥のほうに行ける「子宮体がん」の2種類があります。女性にとって乳がんに並ぶ危険な病気、若い世代に増えている子宮頸がんには、検診と予防ワクチンの接種が有効です。



検査はかんたんです

必ず健診を受けましょう



ワクチンのある子宮頸がんは予防できる唯一のがん

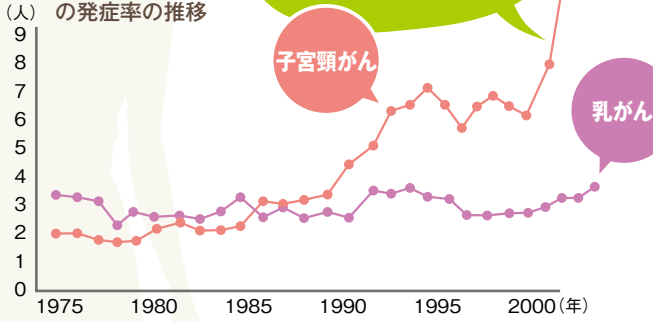
日本では子宮がん検診は20歳(自治体の場合)から可能で、受診率は2割程度。子宮頸がんの発生にHPVの関与が明らかになった現在、欧米など先進国では性交渉の開始年齢に合わせて検診推奨強化に取り組み、イギリスのように8割を超える国もあります。

また、HPV感染を防ぐワクチンが開発され、欧米各国の多くでは12歳前後を基準年齢に公費負担による予防接種を行っています。このワクチンが一番効果を発揮するのは11歳から14歳ぐらいの間で、45歳ぐらいまでの成人女性でも効果があるといわれています。

HPVワクチンは、日本でも平成21年12月から一般の医療機関で接種することができるようになりました。3回のワクチン接種で、HPVの感染から長期にわたってからだを守る事が可能です。

さまざまながんの中で予防できるのは、子宮頸がんだけです。がん検診と予防ワクチン接種を上手に利用して、自分のからだを守りましょう。

■日本における20～29歳の女性10万人当たりの発症率の推移



出典:国立がんセンターがん対策情報センター「がん情報サービス」

20～30歳代の若い女性に子宮頸がんが増えており、最近では乳がんよりも罹患率が高くなっています。

子宮頸がん

乳がん

子宮頸がん と 子宮体がん の違い

子宮頸がん と 子宮体がん は、同じ子宮に発生しますが、それぞれ原因と予防法、治療は異なります。

年間約1万5,000人が発症し、約3,500人が死亡する子宮頸がんは近年、20～30歳代の女性で罹患率、死亡率ともに増加しており、HPV(ヒトパピローマウイルス)というウイルスへの感染が原因と考えられています。ただ、このウイルスは性交渉の経験がある女性なら5人に4人は感染するというありふれたもので、通常はひとりひとりが持つ免疫力で排除されてしまい、がんの発生には至りません。

子宮頸がんは、HPV感染のみ

では発生しないとされています。さまざまな因子が加わり、前がん病変からがんの発生へとつながります。初期段階では出血やおりももなく、まったくと言っていいほど自覚症状はありません。そのため定期的な検査が必要なのです。

一方、子宮体がんは、閉経後の50～60歳代の女性に多い病気ですが、月経不順や不妊症などホルモン異常のある若年者にも増えているようです。不正な出血がある場合(リスクのある人は症状がなくても)、頸がんの検診だけでなく、子宮内膜の検査などを行う体がん検査も受けてください。

子宮細胞診は簡単な検査 痛みも出血もありません

集団検診や人間ドックなどの子宮頸がん検診では、膣鏡診や内

診、細胞診を行います。検診効果は高く、がんになる前段階で発見し治療することもできます。細胞診は簡単な検査で、痛みもなく出血も伴いません。子宮頸部の表面を広くこすって細胞を採取し、がん細胞だけでなく、前がん病変の細胞もいかどうかも判定します。その結果、もし細胞診で異常な細胞が見つかった場合は、病変が疑われる場所の組織を採取し、診断を確定させるのです。

子宮頸がんを診断されると、超音波検査やMRI、CTなど機器を使ってがんの広がりや調へます。そして、がんの進行具合や患者の年齢などを総合的に判断し、子宮温存手術か摘出手術、放射線療法、抗がん剤治療などの中から治療方法を選ぶこととなります。